

「それでも」「他者」と生きてゆくために ——文学研究の可能性——

宮田 絵里

本稿は第三十六回占領開拓期文化研究会（二〇二二年三月二十一日開催）にて行われた、「泉谷瞬『結婚の結節点—現代女性文学と中途的ジェンダー分析—』書評会」における筆者のコメントを要約したものである。

『結婚の結節点—現代女性文学と中途的ジェンダー分析—』（和泉書院、二〇二二年六月、以下、本書と表記する）は泉谷瞬氏（以下、著者と表記する）の博士論文をもとにまとめられており、「結婚」という制度を起点として、大きく「労働」、「異性愛主義」、「生殖」という三つの観点から、現代の文学における女性表象の分析がそれぞれ作品論のかたちで展開されている。本書の特徴として、「結婚」というテーマを掲げつつも、「結婚」している人々を中心に登場する小説だけではなく、「結婚」しなければならぬ、「結婚」したくてもできない、「結婚」したら（結婚）しても「家族」から逃げられない……といった、さまざまな位相の女性たちが登場する小説が取り上げられている点が挙げら

れるだろう。序章で言及されている通り、本書では単なる一般的な「結婚」を描いた小説を並べてその関係性を抽出する、という論じ方はなされていない。なぜならそのような様々な形態の「結婚」表象をまとめて「多様性」という言葉で評価する論じ方は、「家族」にまつわる諸問題を巧妙に隠蔽し、保守的な「家族」観を延命させることに寄与してしまう一面があるためである、と著者は述べている。本書では「結婚」とそれを基底とする「家族」という近代の強固な規範を批判的に問い直しながら、「家族」とは異なる他者との親密な関係を紡ぎだす可能性を文学から模索する試みが展開されている。しかし、それはただ単に規範的な「結婚」の在り方への批判に終始するものではなく、一読すれば分かる通り、著者は各論の中で抑圧的な規範に従って日常を生きていかなければならない女性たち個々の在り方を両義的に、実に注意深く掬い上げている。著者は文学作品をただの「社会状況・現象を説明するための「素材」」（二十八

頁)としない研究方針を掲げ、本書の作品分析の基盤になる理論として、ジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』(竹村和子訳、青土社、一九九九年四月、原著一九〇〇年)を引用する。バトラーによれば、「ジェンダー」は「ひそかに時をつうじて構築され、様式的な反復行為によって外的空間に設定されるアイデンティティ」(二四七頁)だが、その「反復行為」が失敗する可能性のなかにこそ、規範を揺るがす契機がある、とされる。著者はこの理論を文学研究に接続して現実に実践することを宣言しており、本書を見る限り、それは達成されているように思われる。

以上、本書に関して大まかな所感を述べたが、具体的な内容についても触れておきたい。なお、紙面の都合上一部の作品論にのみ言及することを断っておく。

まずは「第二部 異性愛主義の延命」における「第三章 結婚をめぐる争い―笹野頼子『説教師カニバットと百人の危ない美女』論―」(二二三頁〜一五二頁)である。この章において著者が注目するのは、『説教師カニバットと百人の危ない美女』(笹野頼子、河出書房新社、一九九九年一月。以下、本書に従って『説教師……』と表記する)において描かれる「結婚できなかった」女性たちの置き去りにされた「怒り」である。本章ではその「怒り」を、同時代の結婚にまつわる言説やフェミニズムの思想状況などと照らし合わせながら読み解いていく。『説教師……』の作中で何度も何度もゾンビのように主人公にまとわりついてくる

「巢鴨こぼと会」の女性たちは、明らかにフェミニズム的な価値観を忌避する人々として描かれている。しかし一方で、彼女たちのその過剰なまでの暴力性が、自分たちをそのようなゾンビに仕立て上げていった男性中心的社会への怨嗟としても機能していることを著者は指摘する。結婚して幸せな家庭を築くことこそが「普通の女性」の人生であるという幻想は今なお強固だが、フェミニズムはこのような思想を性差別だと批判こそすれ、実際にその価値観に適応してしまった女性たちの居場所には当然ながらなり得なかった。そして適齢期を過ぎて「結婚できなかった」女性たちの居場所は、「結婚」至上主義的な価値観を煽った社会の中にも存在しない。著者は、このように一般社会の中のみならず、フェミニズムという女性のためにあるはずの思想・運動の中でさえ置き去りにされてしまった女性たちの「怒り」を精緻に分析し、「頑なにまで残存する異性愛主義的な結婚観および家族像の基盤によって分断されていく女性たち」(二四七頁)の問題をいち早く提唱した小説として『説教師……』を評価している。

少々本書の話題からは外れるが、筆者はこの女性たちの「分断」という言葉を前に、現在また異なる深刻な問題を想起せずにはいられなかった。それは二〇一八年以降、SNSを中心に瞬く間に広がった、フェミニズムの側からの、トランスジェンダーへの差別と排斥の問題である。特に男性から女性へと性別移行したトランス女性たちを女性専用スペースへの「侵

入者」とみなす言説はいまだに根強く、当事者たちへの苛烈なバッシングは継続している。そして、こうした差別的な言説に笹野頼子が加担している現状があることには触れておきたい。笹野は女性差別の根底には「生得的身体」があるととして、性別移行に関する法律に対し一貫して反対の立場をとり続けている。(インタビュールGBT法成立で「女が消える」芥川賞作家 笹野頼子氏が語る危険性」、小島新一、『産経新聞』、二〇二三年五月二十六日、<https://www.sankei.com/article/20230526-BYKCFYNMFKSZKZPSILOJGS4/>)。このような主張に対し、例えば清水晶子は、「女性の身体」の「傷つけられやすさ」を強調して「その傷つきからの保護にこそ「女性」の連帯の拠り所を見出そうとする欲望」は、結果的に父権的な国家権力を強化することになると批判するが(埋没した棘―現れないかもしれない複数のクイア・ポリティクスのために―、『思想』、岩波書店、二〇二〇年三月)、『説教師……』においてまさに描かれていたのは、そのように巧妙に女性たちを「分断」していく権力構造への「怒り」ではなかったのだろうか。

本書の著者は「同時代の背後に押しやられた存在について、不明瞭な部分も含めた形で思考の契機として読者へ差し出す」(二四六頁)小説として『説教師……』を読み解いているが、本章のような緻密な分析は、時に現実の作者の言説をも織り込んで読者に作品の再考を促していく契機として機能しているのだ、と述べておきたい。

続いて「第三部 選択肢としての結婚／まわりつく結婚」の「第六章 親族関係という「蜘蛛の巣」―金原ひとみ作品の二人組と結婚―」(二一九頁〜二五〇頁)について触れる。本章では金原ひとみの諸作品に触れながら、「婚前」『マリアージュ・マリアージュ』新潮社、二〇二二年十一月、初出は『you you』(二〇一〇年十月)を中心に取り上げ、「生殖」から逃れがたい女性の身体について論じている。本章の分析の核となるのは、「結婚」を契機として、子どもを産む／産まざるにかかわらず、自らの身体が「生殖」という規範にからめとられていく女性の日常的な葛藤であるが、「婚前」における主人公の子どもの「父」が誰なのか曖昧な描写を、既存の親族関係とは別の関係性を喚起させていくものとして転換していく著者の手腕は鮮やかである。同時に、「生殖」の諸問題を論じるときに不可視化されがちなる「産ませる性」である男性側の問題についてもその不在を取り上げることで批判的に言及しており、本章の射程の広さが窺える。

金原ひとみの描く女性たちは、著者が論じているとおり、強制的異性愛に基づく体制に反抗するというよりはむしろ「秩序を形成するために動員される女性」(二六頁)たちではあるが、こと「生殖」というテーマに関して、こうした女性の姿を肯定的に断じていくのではない論じ方は重要である。というのも、妊娠・出産というプロセスを経て母になるという経験は、先ほど取り上げた『説教師……』の「結婚できなかった」女性たち

と同じく、フェミニズムの歴史の中で取りこぼされてきた一面があるからだ。

橋本瑞穂は二〇〇〇年代のスピリチュアル文化、およびその市場と妊娠・出産する女性たちの分かちがたい関係を『妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティ』（集英社、二〇二二年八月）において指摘しているが、その中で青木やよひ・三砂ちづるの言説を比較検討したのち、「母になることを全面的に肯定するということは、フェミニズムがここ三〇年の間で実現できなかった、あるいはしてこなかった出来事」（二七九頁）だと述べている。だからこそ、一般の女性たちは自分を肯定するためのよすがとして「聖なる母」といった表象に接近していくのだ、という橋本の分析を合わせて読むことで、本章の読解はより一層明確になるのではないだろうか。

最後に同じく第三部の「第七章 不幸な結婚が意味するもの―鹿島田真希「冥土めぐり」論―」（二五一頁〜二七五頁）について触れておきたい。この章では「冥土めぐり」（文藝、二〇二二年一月）で描かれている、血縁による「家族」からの逃走、あるいは個人の救済的手段としての「結婚」と、その限界点が指摘されている。この章で特に注目したいのは、著者が「冥土めぐり」において「家族」ではない人との親しい関係性が「家族の比喩」でしか表現されない箇所について触れ、「家族」という枠組みの強固さを再確認したうえで、この小説における「結婚」の関係性をただ肯定することの危険性を指摘している箇所

である。著者が端的に述べるように、現実的な生存戦略としての「結婚」という選択肢は「婚姻制度に則った異性愛核家族」という規範の傍流に配置され、ひいては家族体制のしぶとさを内部で支えることに利用される」（二七〇頁）ことになる可能性を常に孕んでいる。例えば昨今漫画や映像作品においてみられる「契約結婚」というテーマについて考えてみよう。その代表作として挙げられるであろうTVドラマ「逃げるは恥だが役に立つ」（二〇一六年十月十一日〜十二月二十日放送、原作：海野つなみ『逃げるは恥だが役に立つ』講談社、脚本：野木亜紀子、TBS制作）は、「結婚」を一種の「労働契約」の観点から再考した点が高く評価されたが、この「契約結婚」は最終的に男女の「恋愛」に結実していくものとして描かれている。もちろんこれは男女間のロマンスもテーマとされている作品であるため、そこをことさら批判するつもりはない。だが、物語が最後には「恋愛」で結ばれた男女が「結婚」し「家族」になる、というところに帰着し、それが広く受容されるという状況には、本章が指摘するような「結婚」という制度そのものを不問にしておく危険性を感じずにはいられない。また、「契約結婚」というシチュエーションをフックにして「恋愛」に発展するプロットは、「男女は一緒にいれば恋愛するのが当たり前である」という異性愛規範を強固に保全していくものでもある。

逆にこのようなプロットを逆手にとって、異性愛規範のみならず「性愛規範」を問い直す作品もなくはない。以下、本書の

文脈に則つてあるドラマを分析してみたい。

二〇二二年一月から放送されたTVドラマ「恋せぬふたり」(二〇二二年一月十日～三月二十一日放送、原作・脚本・吉田恵里香、NHK総合制作)では、「他者に恋愛感情を抱かない」・「他者に性的に惹かれない」というアロマンティック・アセクシャルの女性と男性の交流を通して、「恋愛」の成就を一つの決着点とする物語の力学への抵抗と、マイノリティの生存戦略としての「親密な関係」の模索の物語が描かれている。このドラマの中で主人公の女性は、他者に対して恋愛感情や性欲を抱かないために「欠陥のある人間」としてみなされてしまうことに苦しんでいる。そんななか、同様のアロマンティック・アセクシャルの男性と出会い、同居することになる。ここでは二人の関係は他の人々からはときに夫婦や恋人のようにみなされるが、主人公たちはそのような「普通」の認識に「おかしい」と抗い続ける。この主人公たちの関係性をどう表現したら良いのだろうか。第二話で主人公の一人である「高橋羽(さとる)」(演・高橋一生)が「僕たちの関係を表す言葉が(「家族」の)他に見つからない」と言う場面があるが、(こ)でも「冥土めぐり」と同様に「家族」の特権性が立ちふさがってくる。しかし、ここでは続くセリフで「家族」ではない「味方」という言葉で互いの関係を表現しようともしており、全ての関係性が「家族」に回収されることへの疑義が明確に表現されている。このドラマでは「家族」という共同体に対する幻想を解体しつつ、「恋愛」・「性愛」的

結びつきによらない、現実的に他者とケアしあう関係を構築する試みがなされているが、それは必然的に異性愛規範・性愛規範の問い直しへとつながっていく。例えばもし「アロマンティック・アセクシャル」ということが明言されていなければ、このドラマにおける主人公二人の関係はどう「解釈」されていたのだろうか。当然のごとくそこに「異性愛」が読み込まれていたのではないだろうか。ここで、過剰に性化される「異性(愛)」の問題が浮き彫りになるのである。

再び本書に話題を戻すが、「第八章 「家族」を作らないという選択―姫野カオルコの介護作品を中心に―」(二七六～三〇五頁)において、著者はとある人物と驚とのささやかな関係性の中に、「生殖家族の形成に依拠しない、そして性別や種すら関わることのない可能性を持ったまったくの偶発的な「他者」、そうした存在から喜びと親密性を知らずに取得してしまうような人間の食欲さ」(三〇〇頁)を見出している。「再生産」に依拠しない他者との「親密な関係」とはいかにして可能なのか、明確な答えは出ようはずもないが、それは本書のように「普通」として覆い隠されている規範がどのように構成されているのかを浮き彫りにしていく、絶え間ない実践の先にこそ拓かれているものなのかもしれない。ここに本書の達成した文学研究の意義がある。